腹腔内大量出血

上腹部に激しい痛みを訴え、冷や汗をかき、ショック状態の中年婦人が緊急入院してきた。明け方トイレに行った後から下腹に痛みが始まり、激痛が治まらないために救命救急センターに入院していた患者さんであった。超音波検査やＣＴ検査も行われ、痛みが上腹部に移動していたため外科の医師の診察も受けたが、病状経過から肝臓破裂等の腹部（消化器）疾患は考えられないため、診断が確定しないまま婦人科病棟に転棟されてきたのである。

胸部から胃部にかけて痛みがあり、上腹部に痛みが限られていたが、内診所見で子宮が大きく、ＣＴ検査・超音波検査で骨盤内に少量の出血と子宮の後方に異常所見があり、卵管炎によるのうよう膿瘍も疑われた。点滴等の応急処置によって状態の悪化は見られなかったが、上腹部の痛みが続き、息苦しさの訴えは変わらず、腹腔内出血が確実であると診断されたため開腹手術をすることになった。

腹壁を切開すると、腹膜を通して大量に出血しているのが見られ、腹膜を切開すると同時に、上腹部に溜まった大量の血液が流出してきた。子宮の裏側と左の卵巣付近に凝血を認めたので、急いで出血部位を調べると、左の卵巣から血液が噴き出しており、排卵の後にできた＜横体＞から出血していることが分かった。

出血した血液が肝臓の裏側に約１４００・溜まり、子宮の裏側にも約４３０ｇの凝血が認められた。子宮外妊娠や卵巣出血等で腹腔内に出血した場合、出血による腹膜刺激症状として下腹の痛みと、子宮と直腸の間に血液が溜まるために、肛門に響く痛みや排便の時の痛みのような違和感を同時に訴えることが多い。この患者さんのように最初から激痛を訴え、症状がすぐに上腹部に移動して息苦しさを訴えるような患者さんは見たことが無かった。手術時の所見から、出血と同時に大量の血液が肝臓の裏側に溜まり、腹膜を刺激して激痛が出現し、出血と激しい痛みのために胸の動きが制限されて息苦しさを訴える症状が強く出たのではないかと思われた。手術は出血部位の止血処置と腹腔内を洗浄して終わった。子宮を摘出する必要も無くホッとして手術室を出た。

婦人科で大量の腹腔内への出血といえば、子宮外妊娠の破裂によることが多く、昔はショック状態になった患者さんを手術することが多かったが、最近ではショック状態の患者さんの手術は少なくなっている。超音波診断装置の普及によって異常妊娠が早く診断され、早く処置が行われるようになったためである。

しかし、今回のような卵巣からの出血の場合にはその診断に苦労することが多く、確定診断ができないまま開腹手術をしなければならないことも少なくない。排卵後に形成された＜横体出血＞の手術は今迄に何例もあり、文献的には 1000・以上おなかの中に出血した横体出血もあるとは聞いていたが、このような形で教えられるとは思いもよらなかった。“患者に学ぶ”ことの多い毎日である。